第Ⅸ章　調査の成果と課題

第１節　縄文時代

西方遺跡におけるこれまで確認されている縄文時代の遺構は、竪穴住居が４軒、落し穴土坑１基、集石、焼土址、土器集中、性格不明の土坑・ピットなどである。第４図 No.15 地点の住居１軒を除き、台地先端部に分布が集中し、西方貝塚として知られる住居もこの位置にあたる。また、出土土器は早期から後期まで多岐にわたるが、前期中葉の黒浜式が主体を占め、遺構も多くがこの時期と捉えられている。

本書掲載地点では第９次調査で不明遺構１基、ピット９か所が確認された。ソフトローム層が露出する深さまで削平され、残存状況が悪いため不明確な部分も多く、出土遺物も少ない。図示した遺物は前期諸磯Ｃ式と後期堀ノ内１式の小片各１点で、本遺跡西部で発見されている土器の時期とも対応する。

台地縁辺部において遺構が確認される状況は、台地先端部に加え西方Ｂ遺跡第１次調査（第４図 16）地点でもみられる傾向である。今回は、これまで調査例のない西方遺跡東部での調査であったが、同様な様相が確認され、新たな資料が蓄積された。

第２節　弥生時代（第 32 図）

下寺尾西方遺跡は弥生時代中期後半の宮の台式期に限定して営まれた環濠集落で、二重の環濠が確認されている。その詳細は「下寺尾西方遺跡の調査」（大村ほか 2018）でまとめられ、平成 31（2019）年には弥生時代中期社会の様相を知るうえで重要な遺跡と評価され、国史跡に指定された。

内側の環濠は東西 240m ×南北 230m、外側の環濠は東西約 400m ×南北 270m の規模と推定され、竪穴住居の変遷は３期が想定されている。遺跡南西部の確認状況から集落Ⅰ期に対応する内側環濠はＶ字形で、集落Ⅱ・Ⅲ期には東側に拡張し、断面逆台形の外側環濠を巡らせたと考えられた。

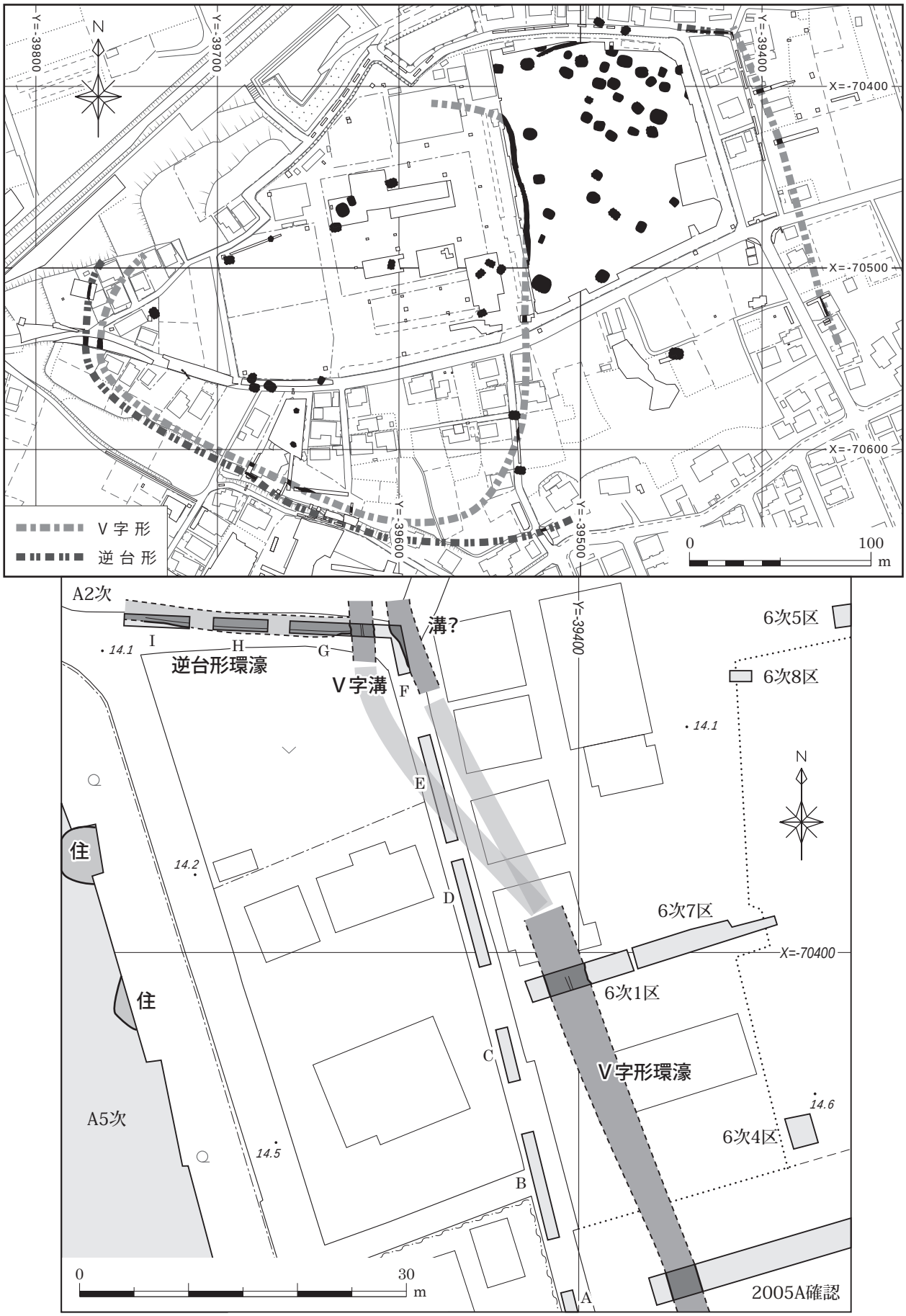
また、「茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅶ」（大村ほか 2019）では平成 30（2018）年に実施された第６次確認調査の成果を報告し、集落北東部での環濠について考察している。この中で、平成 17（2005）年の詳細確認調査（第４図 18）と第６次確認調査で確認されたＶ字溝を集落東縁環濠の一部と認識し、今回第８次調査ではこの環濠の南側延長部を確認したことになる。結果、第６次地点から８次地点まで 130m を直線的に走り、底面標高が両端とも約 11.50m であることが判明した。このことから第８次地点でも本来は幅 3.8m、深さ 2.1m 程度の規模を有するものと推測され、構築時の地表面高度も 13.6m 前後であったと考えられる。

さらに、集報Ⅶでは西方Ａ遺跡第２次調査（第４図 6）の北東部調査区（F・G・H・I）において確認された２条の溝と溝の可能性の高い１か所の落ち込みについても整理している。ここでは第 32 図に関係図を示し、再度まとめておきたい。

① 第６次地点から第８次地点まで直線的に 130m 続く溝は、外側環濠の一部でＶ字形を呈す。

② A2 次調査区Ｇでは南北に走るＶ字溝と逆台形溝の重複がみられ、Ｖ字溝が新しい。

③ 調査区Ｇの逆台形溝は西側調査区Ｈ・Ｉまで台地北縁を東西方向に続き、外側環濠の一部と想定さ



第 32 図　環濠集落復元図（上：1/3,000　下：1/500）

れている。

④　逆台形溝はＶ字溝との重複部東側には続かない。

⑤　調査区Ｆでは溝となる可能性が高い落ち込みの斜面が確認されている。

西方Ａ遺跡第２次調査報告書（富永 1994）では、調査例の少ない年代に限られた調査面積の中で確認された遺構を逆台形環濠と考察した成果は大きく、現時点でも拡張された集落範囲推定の根拠となっている。問題はＶ字形環濠の延長部である。調査区ＧのＶ字溝も報告書では形態・規模等から環濠と推測しているが､逆台形環濠と重複し時期が新しいとされる。第６次地点からこの溝につながると仮定した場合、30m 程度の距離で東西に約 10m 屈曲することになり、やや不自然な感じが残る。さらに、環濠に途切れがないとして図で示したラインを推定すると、調査区Ｄ・Ｅで痕跡が確認されてしかるべきである。逆にいえば、調査区ＧのＶ字溝は集落東縁のＶ字形環濠とはつながらない可能性が指摘できる。

また、第４図 No.19 地点（西方Ａ遺跡第６次調査・西方Ｃ遺跡第２次調査）の報告で、確認された南北に走る古代溝をまっすぐ北に延ばした推定線が調査区ＧのＶ字溝にあたること。Ｖ字溝覆土土層説明に記された「大粒パミス」が貞観スコリアである可能性が考えられることなどから古代官衙遺跡を構成する区画溝と推測している（大村・藤井 2007）。

さらに、調査区Ｆでの落ち込みが溝の斜面であり、Ｖ字形環濠の延長部になると仮定した場合も、逆台形環濠との関係でいくつかの疑問点が残る。逆台形溝とＶ字形溝は拡張した集落外側を限る環濠として同時に存在した遺構なのか。Ｖ字形溝推定線はほぼ直線を呈し環濠と呼ぶのがふさわしいか。などで、「下寺尾西方遺跡の調査」（大村ほか 2018）でも今後の課題とされている部分である。

一方、集落南東部分での環濠推定ラインであるが、第８次地点南隣接地での試掘調査では、より低い面まで削平されていることが確認されており（富永 2009）、現地形の観察から環濠残存は可能性がないものと言わざるを得ない。さらに、第 10 次地点も逆台形環濠の南部推定ラインにあたるが、第Ⅳ章で記したとおり上部層が削平されていることから、やはり残存の可能性は低い。ただし、北寄りのラインを取れば削平範囲を外れる可能性も残されており、今後の取り扱いには十分な注意を向ける必要がある。

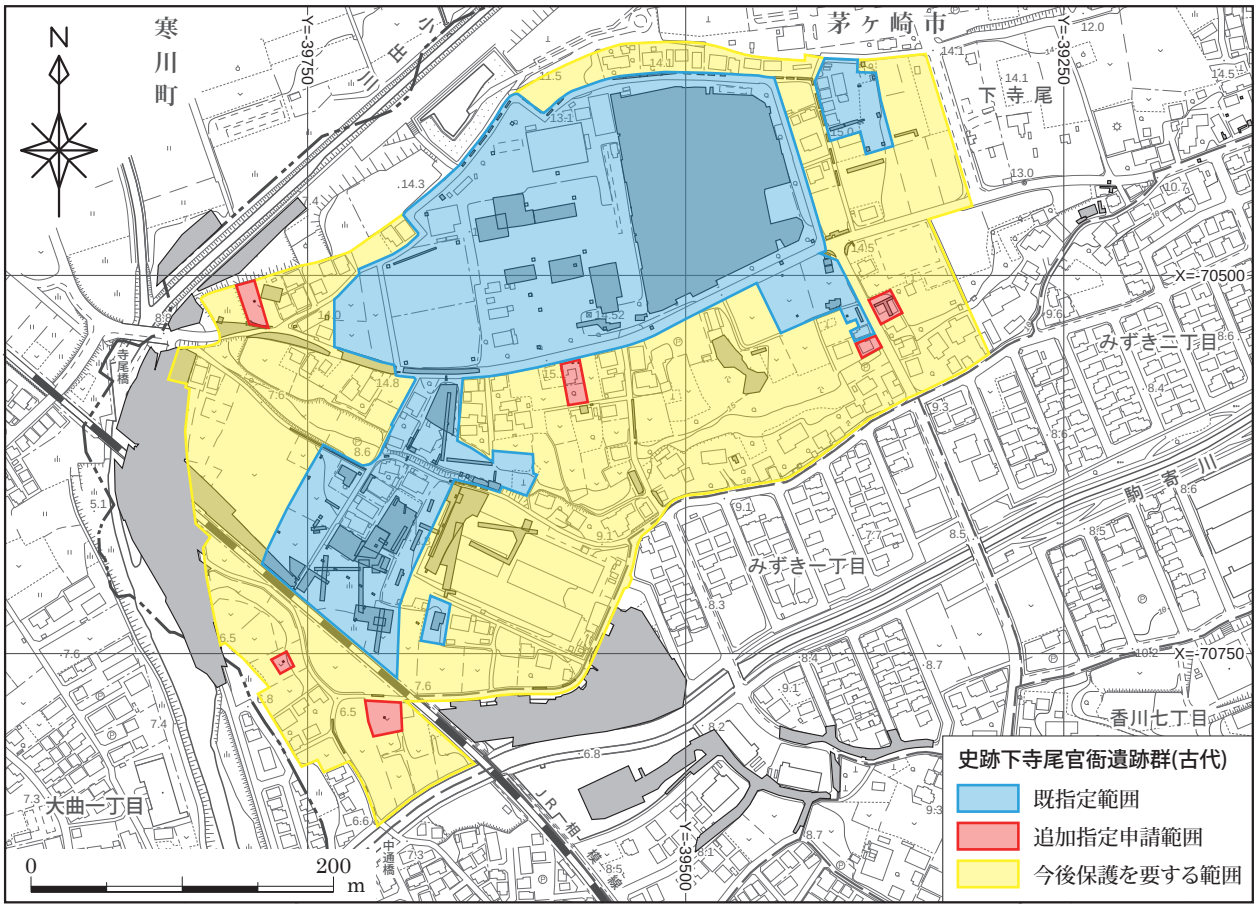
第３節　古代

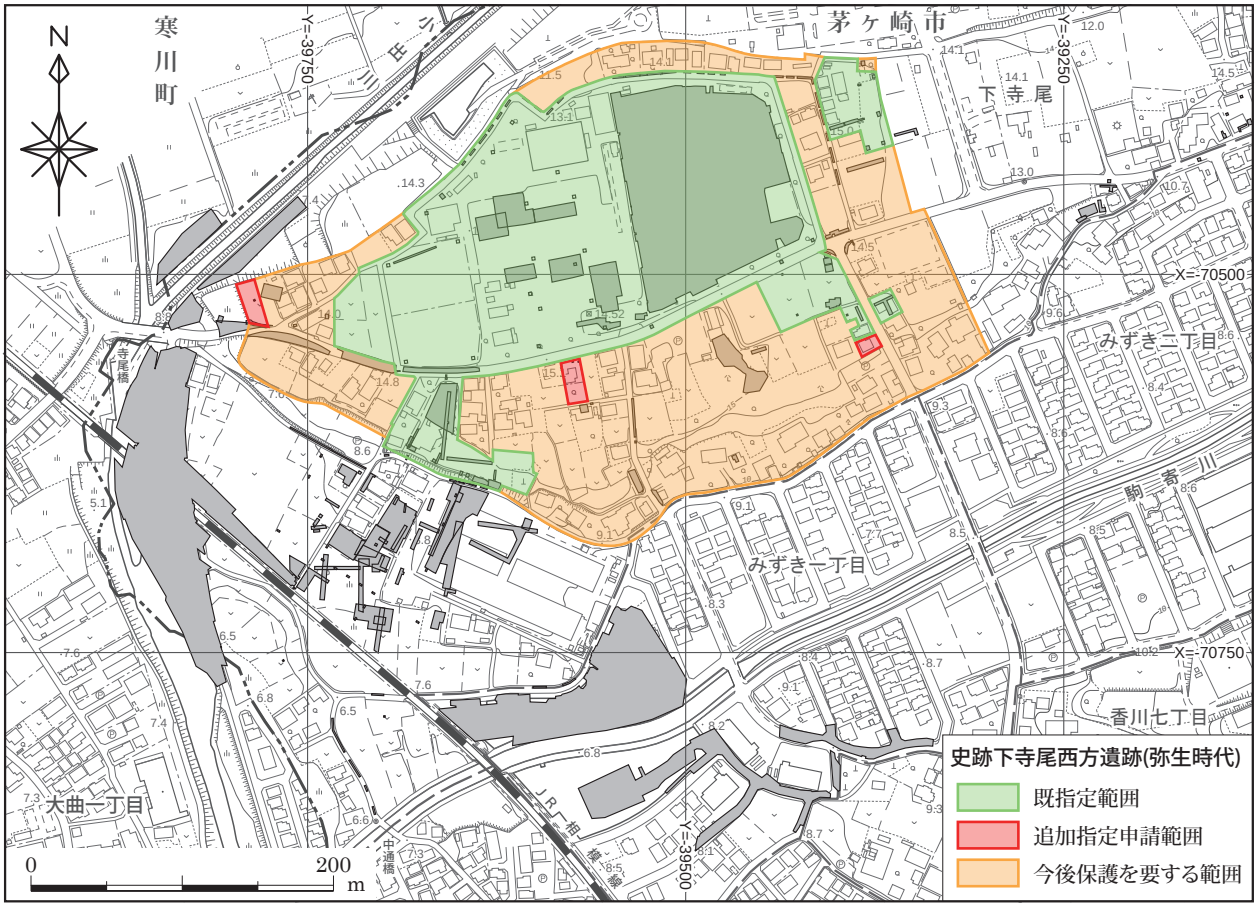
下寺尾官衙遺跡群の基軸要素であり、保存活動の大きな契機となった西方Ａ遺跡第５次調査（第４図 No.15）で確認された高座郡家関連遺構は郡庁、正倉、館・厨を構成する掘立柱建物が整然と並ぶ状況がみられた。史跡指定後の調査では第４図 No.15 地点の西側旧校舎部分で大型掘立柱建物や柵列、ローム土を版築した整地面等が確認され、官衙関連遺構が広く分布することが明らかになってきている。

本書で扱った地点では、第９次で溝状遺構、第 10 次で土坑・ピットをともなう段切状遺構、第 13 次で土坑・竪穴址・不明遺構が発見された。

第９次の溝状遺構は舌状台地の幅が狭まる位置で、台地南縁に沿って東西方向に延びる 20m ほどが確認された。出土遺物は少ないものの７世紀代の須恵器甕口縁部片が発見されており、不明確ながらこの時期に構築されたと推測している。周辺での調査例がないため延長部のつながりは不明で、溝の機能を含め官衙関連遺構との関係は判然としない。

平成 12（2000）年以降くり返し実施された七堂伽藍跡の確認調査（第４図 11）を通して、台地南縁の斜





第 33 図　史跡指定範囲図（1/5,000）　上：史跡下寺尾官衙遺跡群（古代）
下：史跡下寺尾西方遺跡（弥生時代）

面は緩やかな曲線を描く現在の状況とは異なり、小さな谷と尾根が出入りする細かな地形が分布することが判ってきていた。第Ⅳ章で述べたように平成 15(2003)年の西方 B 遺跡第 1 次調査(第 4 図 16)では、台地上の高座郡家と台地下の下寺尾寺院を結ぶ機能も想定される段切状遺構が確認されていることから、第 10 次地点の段切状遺構もその機能と広がりに注意する必要があると考えられる。

造成による台地面削平が帯状に続くことから周辺での調査区展開には多くの困難がともなうと予想される。しかし、官衙関連と推定される遺構の確認は、高座郡家南部域の様相がほとんどつかめていない状況で、今後の保護活動に向けて大きな意味を持つことになると期待させる。

また、西方遺跡中心に近い第 13 次 TP1・2 では市道舗装材の下に古代と推定される遺構覆土の残存を確認した。水道管等の埋設物で撹乱されている部分もあるが、高座郡家正殿に近い位置に遺構が保存されていることが判明したことは今後の整備に向けて重要な要素といえる。

第 4 節　今後の調査に向けて（第 33 図）

下寺尾遺跡群では、平成 27(2015)年の史跡指定以後西方遺跡を中心にくり返し発掘調査が実施されている。その原因としては、まず史跡整備に向けた内容把握を目的とした確認調査があり、文化庁、神奈川県教育委員会、茅ヶ崎市文化財保護審議会下寺尾遺跡群等保存・活用部会などの指導を受け茅ヶ崎市教育委員会が主体となって学術調査を実施している。また、遺跡の残存状況を確認するための小規模調査がある。茅ヶ崎市は史跡保存のために下寺尾遺跡群内での公有地化も進めており、土地所有者との協議を経て調査を実施している。さらに、史跡隣接地では個人住宅等の開発行為も発生し、やむを得ない場合は記録保存調査で対応している。

本書で報告した第 8 次地点は住宅新築を前提に着手されたが、調査中に事業者と協議を行い、開発の中止から遺構の現状保存、公有地として買い上げを経て史跡の追加指定まで届くことになった。下寺尾遺跡群の保存整備事業の中で、多くの関係者の努力が実を結んだもののひとつといえる。

本稿執筆時の令和 6(2024)年 12 月時点で、西方遺跡の調査は遺跡統合後で 22 次に達している。これまではすべて「第＊次確認調査」と呼称してきたが、第 9 次や第 10 次のように記録保存の部分も含むことになり単なる確認調査で対応することは実情に合わないといえる。

したがって、調査原因や調査面積の如何に関わらず今後は「西方遺跡第＊次調査」と呼ぶことが地点把握に有効と考える。関係各所の意思統一を図りたい。

最後に、第 33 図は「史跡下寺尾官衙遺跡群」と「史跡下寺尾西方遺跡」の指定範囲を示したものであるが、両図の追加指定申請範囲とした部分について令和 6 年 12 月 20 日国の文化審議会から答申が出され、追加指定が決定したことを付け加えておく。

引用参考文献

阿部友寿・高村公之・中根賢　1997「芹沢配水池関連遺跡群　行谷遺跡・大島仲ノ谷遺跡・諏訪谷西遺跡・椎ノ木坂遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』28　財団法人かながわ考古学財団

阿部友寿・天野賢一・飯塚美保・池田治・井辺一徳・小川岳人・髙橋香・平尾政幸・宮坂淳一・依田亮一・渡辺外　2010「小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅲ」『かながわ考古学財団調査報告』251　財団法人かながわ考古学財団

井澤純・市川正史・井辺一徳・吉田政行・渡辺外　2004「宮山中里遺跡・宮山台畑遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』170　財団法人かながわ考古学財団

井辺一徳・飯塚美保　2007「小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅰ」『かながわ考古学財団調査報告』223　財団法人かながわ考古学財団

上本進二・浅野哲哉　1999「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告』7　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・藤井秀男・石倉澄子・寺岡早苗　1997『上ノ町・広町遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会・財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

大村浩司・藤井秀男・田尾誠敏・新倉香・鯉渕義紀　2004a「下寺尾西方Ｂ遺跡」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』19　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・新倉香・田尾誠敏・藤井秀男・岡本孝之　2004b「下寺尾七堂伽藍跡確認調査概報」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』20　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司　2005「下寺尾七堂伽藍跡の調査」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』24　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・藤井秀男　2007「下寺尾西方Ａ・Ｃ遺跡」『茅ヶ崎市文化振興財団調査報告』12　財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

大村浩司・藤井秀男・鯉渕義紀　2010「下寺尾西方Ａ遺跡Ⅶ」『茅ヶ崎市文化振興財団調査報告』22　財団法人茅ヶ崎市文化振興財団

大村浩司・藤井秀男・石倉澄子・澤村奈穂子　2011「下寺尾西方遺跡」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』36　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・田尾誠敏・髙橋香　2013「下寺尾官衙遺跡群の調査」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』40　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・三戸智也・加藤大二郎・鈴木綾・上本進二　2018「下寺尾西方遺跡の調査」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』52　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・三戸智也　2021「下寺尾官衙遺跡群Ⅰ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』59　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・三戸智也・加藤大二郎・上本進二　2023「下寺尾官衙遺跡群Ⅱ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』64　茅ヶ崎市教育委員会

大村浩司・藤井秀男・髙橋香　2024「下寺尾官衙遺跡群Ⅲ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』70　茅ヶ崎市教育委員会

岡本勇　1978「七堂伽藍跡を掘る－茅ヶ崎市下寺尾遺跡調査概報－」『茅ヶ崎市史研究』3　茅ヶ崎市

小川岳人・飯塚美保・髙橋香・宮坂淳一・小西絵美・谷口肇・鈴木次郎　2008「小出川河川改修事業関連遺跡群Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』224　(財)かながわ考古学財団

押木弘己・長澤保崇　2013「本村居村Ａ遺跡（第６次）　本村居村Ｂ遺跡（第４次）」『茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団調査報告』36　茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団

神奈川県教育庁　『神奈川県・茅ヶ崎市埋蔵文化財包蔵地台帳』

小林秀満・柏木善治・井関文明　2016「さむかわの古墳」『神奈川考古』第 52 号（40 周年記念号）　神奈川考古同人会

寒川町　2000「図録さむかわ」『寒川町史』15 別編

三戸智也・大村浩司・上本進二　2019「茅ヶ崎市埋蔵文化財調査集報Ⅶ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』53　茅ヶ崎市教育委員会

下寺尾寺院跡研究会　1997「下寺尾寺院跡の研究」『茅ヶ崎市文化財資料集』第 12 集　茅ヶ崎市教育委員会

鈴木次郎・近野正幸　1995　「宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ」『かながわ考古学財団調査報告』4　(財)かながわ考古学財団

世界・焱の博覧会波佐見町運営委員会　1996『波佐見青磁展・くらわんか展』

髙橋香　2016「相模における後期・終末期古墳と初期寺院の諸問題について（1）」『神奈川考古』第 52 号（40 周年記念号）　神奈川考古同人会

茅ヶ崎市教育委員会　2021『第 31 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』

茅ヶ崎市教育委員会　2022『第 32 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』

茅ヶ崎市教育委員会　2022『第 33 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』

茅ヶ崎市教育委員会　2023『第 34 回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』

富永富士雄・大村浩司・小竹実佳子・藤原一哉　1988a「下寺尾西方Ａ遺跡」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』1　茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

富永富士雄　1988b「西方Ｃ遺跡」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』2　茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

富永富士雄　1994「下寺尾西方Ａ遺跡第２次」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』7　茅ヶ崎市教育委員会

富永富士雄　2009「市内遺跡試掘・確認調査報告Ⅶ」『茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告』3　茅ヶ崎市教育委員会

中村哲也・河合英夫・吉田浩明　2005『香川・下寺尾遺跡群　北Ｂ地区・下寺尾廃寺地区・篠谷地区発掘調査報告書』香川・下寺尾遺跡群発掘調査団

平塚市　1999『平塚市史』11 上　別編考古（1）

平塚市　2003『平塚市史』11 下　別編考古（2）

松田光太郎・井辺一徳・田村裕司　1999「臼久保遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』60　(財)かながわ考古学財団

村上吉正・井澤純・宍戸信悟・岩田直樹・久保信乃　2003「下寺尾西方Ａ遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』157　財団法人かながわ考古学財団